

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03790

研究課題名（和文）発達障害児の不注意傾向と描線行動の相関解明による書字支援効果の横断的研究

研究課題名（英文）The study of teaching Kanji characters for children with attention-deficit and with other developmental disabilities

研究代表者

鶴巻 正子（Tsurumaki, Masako）

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：40272091

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 14,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は描線や書字の困難さを「不注意」との関係からとらえ、発達障害に共通な因子としての「不注意」に着目することで、不注意傾向の子どもに応じた書字支援の指導法を実証的に検討することを目的とした。児童生徒にみられる不注意傾向を明らかにするとともに、構成見本合わせ課題を応用した支援ソフトやアプリの開発と改良をとおして不注意傾向のある子どもの漢字の書字支援の在り方を検討した。学習に楽しく参加できる反面、指導者側の負担が大きいなどの課題は今後の研究にいかしていきたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

通常の学級に在籍する発達障害の子どもなかでも不注意傾向のある子どもは教室内でおとなしく過ごすことが多く、本人が抱える課題に気づかれにくい傾向がある。本研究はこのような不注意傾向のある子ども達に使いやすい漢字学習用ソフトやアプリを実践的研究をとおして開発することを目的とした。漢字の偏と旁を組み合わせる漢字を作るソフトとアプリを開発し児童に試みてもらったところ、機種に対応したアプリの改良などが明らかになったが、子どもたちからは楽しく学習できる、取り組めるなど一定の評価が得られた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine and develop methods to teach reading and hand-writing Kanji characters for children with attention-deficit and with other developmental disabilities. We improved software and smartphone apps. The participants in this research engaged in the constructed-response matching-to-sample tasks using the software and smartphone apps. We need further improvement for teaching handwriting of kanji characters to children with attention-deficit.

研究分野：特別支援教育

キーワード：書字支援

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

学校教育の学業課題には、選択的注意 (selective attentions) の課題と持続的注意 (sustained attentions) の課題が存在し、注意欠如多動性障害の子ども (以下、ADHD 児) はこのいずれにも失敗しがちであるといわれている (例: Zentall, 2005)。選択的注意は複雑な刺激のなかの重要な部分や細かな部分に注目を要求する課題であり、持続的注意は一定のパフォーマンスを得るために繰り返し練習を必要とする課題である。漢字学習は、初期段階では選択的注意課題であり、定着段階では持続的注意課題に移行すると考えられる。ADHD 児の漢字学習を困難にしている要因の一つとして「注意」の問題が指摘された。また、中ほか (2014) は、書字困難に関与するリスク要因については、漢字の形や部首の視覚認知と視覚記憶の評価を含めた検討が必要であると指摘している。

Takahashi, Tsurumaki ほか (2015) は、発達障害児にみられる鏡映文字には対称変換過程の関与が示唆されたと述べている。以上のように書字は注意や視覚認知に依存する活動であり、「不注意」は書字学習のリスク要因として指摘されることが多い。しかしながら、「不注意」に着目した系統的な指導法研究がほとんど報告されていない。

代表者は発達障害の子どもの漢字の書字指導を、「練習嫌い」(Tsurumaki, 2008) や「教師の漢字学習に対する考え方」(玉木・鶴巻, 2013) という個人要因と環境要因から検討することにより、発達障害児には構成見本合わせ課題が効果的であることを報告してきた (例: 鶴巻・仁平, 2013)。

構成見本合わせ課題は、複数の構成要素を選択・組み合わせることで正しい漢字を構成する方法である。多動性・衝動性の高い子どもや ASD 傾向の子どもには、構成見本合わせ課題により書字獲得に一定の効果がみられるのに対し、書字困難が解決されにくい不注意傾向の子どもの存在が明らかになった (鶴巻, 2007)。書字獲得には、前提スキルの獲得とともに注意が関わり、「不注意」と書字困難の関連性が仮定される。しかし、不注意優勢の子どもは担任教師にさえその困難さが認知されにくい。不注意のある発達障害児への指導法開発は、障害理解の観点からも喫緊の問題であると考え本研究課題を設定した。

### 2. 研究の目的

『精神疾患の分類と診断の手引き (DSM-5)』において、不注意は ADHD 児の特徴として示されている。代表的な行動特徴は、綿密な注意ができない、不注意な間違いをする、注意の持続が困難、外的刺激によって気が散るなどである。しかし教育的ニーズのある子どもの行動特性は重複するといわれている (例: 文部科学省, 2012)。つまり、不注意は ADHD の診断を受けた子どもだけの問題ではない。本研究は描線や書字の困難さを「不注意」との関係からとらえ、診断名や障害名ではなく、発達障害に共通な因子としての「不注意」に着目することで、不注意傾向の子どもに応じた書字支援の指導法を実証的に検討することを目的とする。

### 3. 研究方法

#### (1) 研究組織

特別支援教育と応用行動分析を専門領域とする代表者及び研究分担者 2 名、認知科学や発達心理学を専門とする連携研究者 2 名 (2017 年度まで)、教師や保育士として経験豊富な研究協力者 5 名による研究組織とする。

#### (2) 年度ごとの研究スケジュール

不注意傾向の子どもに応じた書字支援の指導法を実証的に検討するために、研究参加者の募集、参加者の不注意傾向の聞き取り、児童生徒にみられる不注意傾向の収集、指導用ソフトやアプリの作成・改良と活用を行う。年度毎のスケジュールは次のとおりである。なお、福島大学倫理審査を受け 27-20 として承認されている。

H28 年度: 研究参加者の募集と実践的研究の推進・運動遊びの実践

H29 年度: 「不注意」傾向のある子どもの書字、運動遊びの実践

H30 年度: 「不注意」傾向のある子どもを対象とした指導法としての自作アプリとパソコン用ソフトの開発

R 元年度: 「不注意」傾向のある子どもを対象とした指導法としての自作アプリとパソコン用ソフトの開発・改良、実践的研究における活用、「不注意」傾向のある子どもの書字、公開シンポジウムの開催

### 4. 研究成果

#### (1) 研究参加者のための指導プログラム

研究参加者のための指導プログラムを 4 年間実施し、学年が異なる男子児童がのべ 12 名参加した。全員通常学級に在籍し、一部の児童は ASD の診断を受けたり通級指導にかよったりしていた。この指導プログラムへの参加理由は文字の読み書きや行動において教育的ニーズがあったことだった。実践的研究として指導プログラムを 1 か月に 2~3 回の割合で行った。1 回は 90 分で、読み書きにおける個別課題を行う児童用の教室と親支援のための親教室を同時に実施した。鉛筆や箸の持ち方など微細運動には特に課題がなく、視力について指摘された児童もいなかった。保護者からの聞き取りにおいて粗大運動が苦手か嫌いな児童が多かったため、指導プログラ

ムの一環として1年目と2年目に運動遊びを取り入れた。歩く、走る、飛ぶなどの全身運動のほかに縄跳び(前飛びと大縄飛び)など粗大運動を中心とした取り組みを行い、2年間の実践において参加者全員が前飛びができるようになり自信をつけた。大縄跳びは補助付きで飛べた児童も一部いた。最初は拒否していた児童も参加できた。

## (2) 不注意傾向のある子どもにみられる書字の困難さ

研究参加者や小・中学生の様子から不注意傾向の子どもが感じている書字や読字の困難さを収集した。収集には小・中学生を担任した経験のある教員に協力を依頼した。文字や行をとばして読むこと、特殊音節の読み書きが苦手、黒板だけでなく手元の手本を見て書くことにも困難を感じる、マス目にあう大きさの文字を書くのが難しいこと、線の本数をあやまること、子どもが文字のどこを見ているのかわかりにくいので支援の手立てが立てにくいこと、子どもの視力(見る力)の弱さを感じたり疑ったりする場合があること、子どもの目を見て視線を合わせたあとで書字支援を行うように心がけていること、声をかけて子どもの注意を引き付けてから支援することなどがおもな内容であった。

ところで、通常学級に在籍する児童の漢字書字の誤反応を無反応、実在文字、非実在文字に分類し、さらに実在文字の全エラーの内訳をもとめたところ、形態類似文字、類音異字、意味的関連文字、同音異字の合計が90%を超え、複合的誤り、構成要素間の広い間隔、文字の傾きの誤りはわずかだった。先行研究(井村ほか, 2011)は「小学生の読み書きスクリーニング検査: STRAW」の漢字書字の誤りを実在文字と非実在文字に分類し誤反応を分析した。定型発達群の実在文字の書き誤りは形態類似文字が33%、同音異字が18%と分類され、本研究調査と同様の傾向を示していた。それに対し類音異字は4.9%、意味的関連文字は7.4%で、実在文字の書き誤りの割合がいずれも20%を超えた本調査とは異なる傾向だった。本調査では「実験をこころみる」を「心みる」(類音異字)、「魚をやく」を「燃く」(意味的関連文字)と表記する誤りが複数の児童に見られた。本調査が訓読みによる1文字の漢字書字を課題としたため2文字の漢字からなる熟語より制約が少なく、児童が自由に発想しやすかったのではないかと思われる。一方、非実在文字は明らかな誤りとともに、偏や傍の一部、あるいは全部が抜け落ちるタイプの書き誤りが多く見られた(鶴巻ほか, 2019)。

また、12文字に関するADHD傾向無群(4名)とADHD傾向有群(5名)を対象として10の観点別評価点の達成度を比較してみた(図1)。各項目の満点が異なるため、10項目の漢字書字の評価の平均と評価点合計の平均を、それぞれの満点に対する割合とし、本研究では達成度とした。いずれの項目もADHD傾向有群の漢字書字の観点別評価点の達成度は、ADHD傾向無群に対して達成度が低いという結果が得られた(鶴巻ほか, 2019)。

通常学級に在籍する児童にも書き誤りや無反応を示す子どもたちが存在している。図1に示したように、ADHD傾向のある子どもたちは傾向のない子どもたちに比べいずれの観点においても達成度が低かった。また、不注意傾向のある児童生徒の書字にはさまざまな困難さがみられ、教師は指導方法を工夫していた。このような子どもたちの書字を支援するために、本研究ではパソコン用の漢字の書字ソフトとタブレット用の書字アプリの開発と改良をめざした。

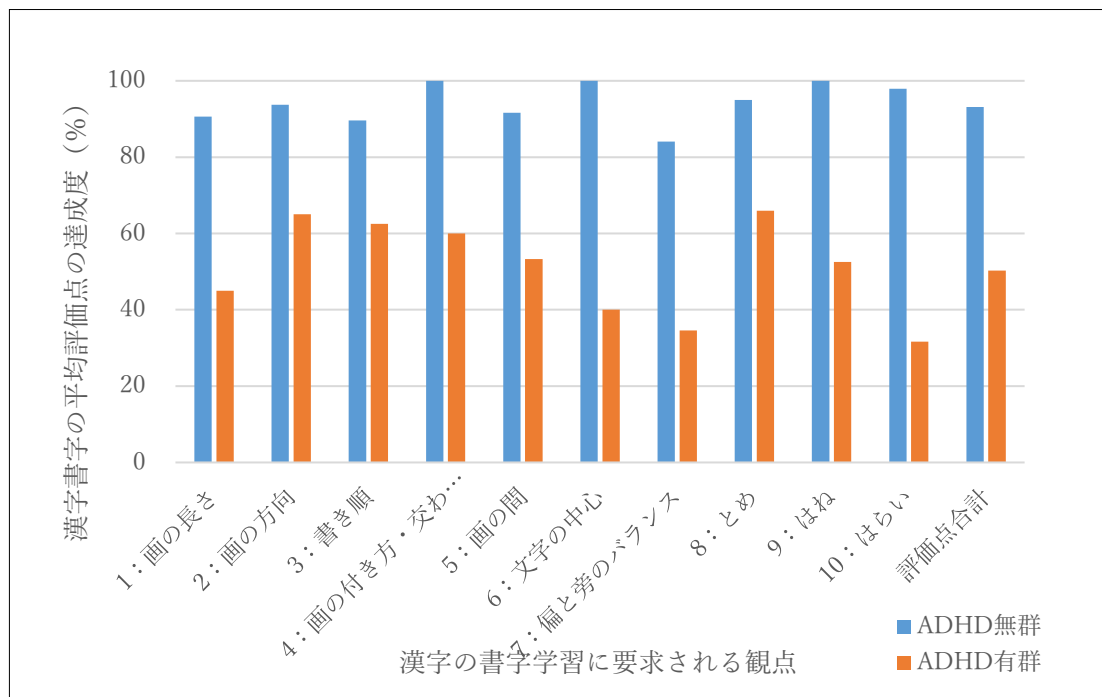


図1 漢字書字の平均評価点の達成度

### (3) 指導用ソフト・アプリの開発と改良

研究代表者と分担者は、漢字の書字学習のパソコンソフトとして、構成見本合わせ課題による漢字の書字ソフトを開発した。見本刺激が漢字かな交じり文、漢字、ひらがな、カタカナに対応している。選択刺激の選択肢は8で漢字の偏と旁を組み合わせるものである。これは、従来、研究代表者が開発してきたソフトを改良したものである。

研究代表者と分担者はさらに漢字の書字学習のタブレット用として、上記パソコン用と同様に、見本刺激が漢字かな交じり文、漢字、ひらがな、カタカナに対応したアプリを開発した。選択刺激の選択肢は8である。

アルファベットの組み合わせによる英単語の学習用タブレットアプリについても同様に研究代表者と分担者が共同で開発した。

研究参加者に予備実験として実施したところほとんどの児童の感想は、面白い、もっとやってみいたいというものだった。しかし、正反応の位置は毎回ランダムに変えたが選択パターンが同じであったり、書字は苦手であるが偏と旁の組み合わせが正しく選択できたりする児童のなかには数問で飽きてしまう場合もみられた。保護者からはパソコンで偏と旁を正しく組み合わせたことによりノートに漢字として書けるようになるのかという質問も出された。また、正反応と誤反応に対するフィードバックの工夫、タブレットの種類により画像の表示に不具合が生じる場合に対する改良など、今後、不注意傾向のある子どもの認知特性や行動上の困難さの理由を明らかにしながら、漢字の書字学習に支援が必要な発達障害のある子どもを対象としたこのソフトやアプリを活用した実践的研究を行うことで書字支援のあり方を検討できるものと思われる。研究代表者と分担者はこれまでの成果と研究の推進状況を発表するために、福島大学において公開シンポジウムを開催した。漢字の書字学習が困難な子ども達へのアプローチの工夫、興味の継続をふまえた指導の必要性、ICTの活用をふまえた支援方法は、教育的ニーズのある子どもたちにとって楽しく学習できる反面、その子ども専用のアプリを作る難しさ、指導者側の準備に対する負担などに今後の研究にいかすべき貴重な意見が得られた。

### <引用文献>

- 井村純子・春原則子・宇野彰・金子真人・Taeko N. Wydell・栗屋徳子・後藤多可志・狐塚順子・新家尚子 (2011). 発達性読み書き障害児と小学生の典型発達児における漢字書取の誤反応分析—小学生の読み書きスクリーニング検査 (STRAW) を用いて—. *音声言語医学*, 52, 165-172
- 中知華穂・吉田有里・雲井未歎・大関浩仁・五十嵐靖夫・小池敏英 (2014) 小学2年における漢字読字・書字困難のリスク要因に関する研究—CHAID分析による要因評価に基づく検討—. *特殊教育学研究*, 52, 1-12.
- Takahashi, J., Tsurumaki, M., Tamaki, K., Takaya, R., and Sato, T. (2015) Mental rotation of viewpoint-dependent/independent features in children with difficulty in Japanese Kanji Writing. *Journal of Special Education Research*, 13(2), 35-43.
- 玉木宏樹・鶴巻正子 (2013) 発達障害児における漢字の書字—漢字書字の細部エラーに対する教師の評価に影響を及ぼす要因—. *福島大学総合教育研究センター紀要*, 15, 69-76.
- Tsurumaki, M. (2008) Self-esteem enhancement in children with attention-deficit/hyperactivity disorder. *Tohoku Psychologica Folia*, 66, 105-111.
- 鶴巻正子・仁平義明 (2013) 発達障害児が作る漢字の書字問題 (1) —問題作成までの予備的研究—. *東北心理学研究*, 63, 11.
- 鶴巻正子・仁平義明・佐藤 拓・高橋純一 (2019) ADHD傾向の子どもが書く漢字に見られる特徴. *福島大学人間発達文化学類論集*, 29, 53-60.
- Tsurumaki, M. (2007) Teaching Handwriting of Chinese Characters to Children with ADHD. Association for Behavior Analysis International, 33rd Annual ABA Convention International Symposium. San Diego.
- Zentall, S. S. (2005). Theory- and evidence-based strategies for children with attentional problems. *Psychology in the Schools*, 42, 821-836

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 丹治敬之, 勝岡大輔, 長田恵子, 重永多恵	4. 巻 27
2. 論文標題 知的障害特別支援学校の国語における刺激等個性の枠組みに基づく読み学習支援アプリの導入 児童生徒の学習効果と教師にとっての有用性の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 LD研究	6. 最初と最後の頁 314-330
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Takahashi, J. & Tsurumaki, M.	4. 巻 77
2. 論文標題 Construction of patterns considering spatial configuration between radicals of Japanese Kanji and their complexity ratings.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Tohoku Psychologica Folia	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 丹治敬之・横田朋子	4. 巻 65
2. 論文標題 自閉症スペクトラム障害児に対する作文の自己調整方略学習 (SRSD) モデルを用いた小集団介入	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 526-541
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.5926/jjep.65.526">https://doi.org/10.5926/jjep.65.526</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Takayuki Tanji & Fumiyuki Noro	4. 巻 6
2. 論文標題 Emergent anagram and vocal spelling via stimulus equivalence in Japanese children with intellectual disabilities	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Special Education Research	6. 最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.6033/specialeducation.6.33">https://doi.org/10.6033/specialeducation.6.33</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋純一・遊佐千尋・鶴巻正子	4. 巻 17
2. 論文標題 子どもの行動に対する肯定的捉え直しが発達障害幼児の保護者の養育スタイルに及ぼす影響	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 障害理解研究	6. 最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋純一・五十嵐育子・神野與・鶴巻正子	4. 巻 20
2. 論文標題 インクルーシブ教育に対する質問紙 (SACIE-R日本語版) の標準化	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 福島大学総合教育研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 61-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takahashi, J., Tsurumaki, M., and Ozeki, A. (高橋純一・鶴巻正子・大関彰久)	4. 巻 75
2. 論文標題 Attitudes Formation of Japanese Teachers toward Inclusive Education System.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Tohoku Psychologica Folia	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹治敬之・大竹喜久・長谷雄也・松岡佑奈・眞利結子・中村茉結・向井美沙希	4. 巻 162
2. 論文標題 米国カンザス州ブルーバレー学区の高校におけるソーシャルスキルプログラム	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究集録	6. 最初と最後の頁 79-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹治敬之・矢野悠	4. 巻 164
2. 論文標題 通常の学級における多層指導モデル(MIM)を用いた特殊音節の読み指導の有効性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究集録	6. 最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹治敬之・吉光美陽	4. 巻 7
2. 論文標題 ソーシャルナラティブ(SN)介入の効果に影響を及ぼす条件の検討: コミュニケーションスキル及び社会的スキルを中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 岡山大学教師教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 71-80
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) <a href="http://doi.org/10.18926/CTED/54932">http://doi.org/10.18926/CTED/54932</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴巻正子・仁平義明・佐藤 拓・高橋純一	4. 巻 29
2. 論文標題 ADHD傾向の子どもが書く漢字に見られる特徴	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福島大学人間発達文化学類論集	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鶴巻正子・仁平義明	4. 巻 27
2. 論文標題 子どもが書く漢字に対する教員の要求水準	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福島大学総合教育研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 51-56
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横山萌・丹治敬之	4. 巻 10
2. 論文標題 年長児におけることば遊びとひらがな単語読字の流暢性との関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岡山大学教師教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="http://doi.org/10.18926/CTED/58116">http://doi.org/10.18926/CTED/58116</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshihisa Ohtake, Gregory Cheatham, Takayuki Tanji	4. 巻 10
2. 論文標題 A Japanese-United States Faculty-Led Study Abroad Program for Special Education Teacher Preparation	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岡山大学教師教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 165-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="http://doi.org/10.18926/CTED/58128">http://doi.org/10.18926/CTED/58128</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 高橋 純一・鶴巻正子
2. 発表標題 パターン認知にもとづいた漢字書字エラーの分析
3. 学会等名 東北心理学会第72回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柿本りえ・半田瞳・高浜浩二
2. 発表標題 神経発達症児に対する反応見本合わせ課題を用いた漢字熟語指導
3. 学会等名 日本行動分析学会第36回年次大会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 中山由稀・瀬谷奈々美・高浜浩二
2. 発表標題 神経発達症児に対する構成反応見本合わせ課題が漢字の読み書きの獲得に与える効果
3. 学会等名 日本行動分析学会第36回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丹治敬之・横山萌
2. 発表標題 年長児のことは遊びとひらがな単語読み能力との関連
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福田航希・丹治敬之・安藤美華代
2. 発表標題 高等学校における通級による指導に対する発達障害の子を持つ保護者の期待と不安に関する探索的検討
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丹治敬之・岬和希
2. 発表標題 ADHDのある小学3年生が示す家庭での問題行動に対する支援：トークンエコノミー法における強化子提示方法の操作が問題行動の低減に与える影響の検討
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岬和希・丹治敬之
2. 発表標題 発達障害のある小中学生に対する感情のコントロールを目指した小集団プログラムの開発と効果の検討 - 自己調整学習の視点から -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丹治敬之・岡崎健太
2. 発表標題 体育用具の準備片付け場面において特別な支援を必要とする児童と他児童の相互援助を促すための集団随伴性の適用
3. 学会等名 日本行動分析学会第36回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鶴巻正子・高橋純一
2. 発表標題 発達障害児の母親による相互サポートをめざした実践的研究
3. 学会等名 東北心理学会第72回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋純一・鶴巻正子・大関彰久・村上つかさ
2. 発表標題 保護者の障害理解が養育スタイルの変容に及ぼす影響
3. 学会等名 日本障害理解学会2018年大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瀬谷奈々美・高浜浩二
2. 発表標題 ASD児に対するCRMTS課題を用いた漢字の読み書き指導
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会（2017愛知大会）名古屋国際会議場
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 丹治敬之・茂木成友・高橋彩
2. 発表標題 幼児におけるひらがなの読みと音韻意識の関係分析：刺激等価性パラダイムを用いて
3. 学会等名 日本行動分析学会第35回年次大会（福島大学，コラッセふくしま，福島市）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 神山努・丹治敬之
2. 発表標題 自閉スペクトラム児の読み書き指導に関するペアレント・トレーニング
3. 学会等名 日本行動分析学会第35回年次大会（福島大学，コラッセふくしま，福島市）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋純一・鶴巻正子
2. 発表標題 子どもの行動に対する肯定的捉え直しが保護者の養育スタイルに及ぼす影響
3. 学会等名 第12回東北心理学会・北海道心理学会合同大会（東北心理学会第70回大会・北海道心理学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 半田瞳・高浜浩二
2. 発表標題 ASD児に対するイラストを用いた書かない漢字指導 書字の苦手さに配慮した教材設定
3. 学会等名 日本LD学会第25回大会（東京）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 高橋純一・鶴巻正子
2. 発表標題 漢字の空間的形状の複雑さが書字エラーに及ぼす影響 - 発達の観点とADHD傾向の個人差から -
3. 学会等名 日本認知心理学会第17回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安田初美・大関彰久・高橋純一・鶴巻正子
2. 発表標題 知的障害特別支援学校における家庭科教育
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 朝倉聡子・葦澤佳奈・管家勝・菅野紀子・加藤尚子・香野さおり・半沢信光・谷口信高・齋藤俊則・大関彰久・鶴巻正子
2. 発表標題 発達支援室がつなく切れ目のない子育て支援の取組 - 乳幼児期から児童期への支援 -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 若林風佳・高浜浩二
2. 発表標題 神経発達症児に対する音素に基づく構成反応見本あわせ法が英単語学習に与える効果
3. 学会等名 日本行動分析学会第37回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大森幹真、山本淳一、垣花真一郎、丹治敬之、石塚祐香
2. 発表標題 自主シンポジウム：読み支援の応用行動分析 研究と実践のための刺激作成（演題：見本合わせ法を用いた文字・単語の読み支援）
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 一般社団法人日本行動分析学会編，高浜浩二（「プロンプト」「無誤弁別学習（応用）」「行動モメンタム（応用）」）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 858
3. 書名 行動分析学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>e支援アプリ  <a href="https://yomikaki-eshien.jp/">https://yomikaki-eshien.jp/</a>          鶴巻正子・丹治敬之・高浜浩二，科研費による公開シンポジウム「発達障害のある子どもへの読み書き支援 アプリ開発とその効果」を開催（日時：2019.12.7，場所：福島大学）</p>
---

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高浜 浩二  (Takahama koji)  (40616299)	作新学院大学・人間文化学部・教授    (32205)	
研究分担者	丹治 敬之  (Tanji Takayuki)  (90727009)	岡山大学・教育学研究科・講師    (15301)	
連携研究者	高橋 純一  (Takahashi Junichi)  (10723538)	福島大学・人間発達文化学類・准教授    (11601)	
連携研究者	高谷 理恵子  (Takaya Rieko)  (90322007)	福島大学・人間発達文化学類・教授    (11601)	